



修理を重ねて集落の中心に鎮座して氏子を見守る本殿

春祭(4月15日頃)は、満開の桜に囲まれて行われる



集落の若者達で組織する青年団が歌や踊り、芝居などを披露する舞台としても使われたという広い拝殿

稲生大明神(おイナリさん)

享保六年(一七二二)造立の棟札があることから、創建はその頃と推測される。以来幾度となく修理再建、屋根の葺き替えなど世話家を中心に氏子中で奉仕し、集落全体で協力して神社を守ってきたことが伺える木札が社に保管されている。

所在地 上甲九七番地(県道68号線沿い志屋方面へ甲田集会所を過ぎた右側) 井原五社のひとつ。 甲田の守護神。

由来 創建時は「井原村稲荷大明神」であったがいつの頃から現在の「稲生神社」と変えられた。 農耕生産の守護神としての意味を込められたのかもしれない。

祭日 四月十五日頃 春祭
十一月二十三日 秋祭

四十坪の広い境内には、大きな銀杏の木がそびえている。神社の修理費用捻出の為に伐採される運命だったが、朝晩この木を拝んできた近所のご婦人の「何とか神木は切らずに残したい」との一言から、集落全体の総意となり費用は各戸の寄付金でまかなわれたという。氏子の人たちで植えられた桜の木も大きく育って、毎年春祭の頃には見事に咲きそろう。昭和三十年頃までは、他地区の子供や帰郷の息子や娘、友人、家族が集まって奉納相撲や芝居などで夜の更けるまで賑やかに過ごし、温かく豊かな時間が流れていた。